

話を聞くと、男性は3日間徹夜で働き、倒れているところを事務所で発見されたそうです。倒れる前に「働き過ぎだ」と誰かが止めることができたら、と思わずにはいられませんでした。

救急医療はもちろん重要ですが、病院で待つ

いるだけでは助けられない人たちがいます。病気になる前段階で、働き盛りの人たちにアプローチできるのは産業医しかいない。それで産業医になることを決意しました。

### 神栖市若手医師きらっせプロジェクトとの連携

この地域の企業へ赴任し、産業医を志す若手医師を育てるため、社会医学系専門医研修プログラムの導入にも注力した結果、意欲ある若手医師が集まるようになりました。その経験をもとに、若手医師の活躍するフィールドづくりを地域に広げたのが、神栖市若手医師きらっせプロジェクトで支援している産業医学基礎研修会であり、今回立ち上げたトレーニングセンターなのです。

神栖市で開催される研修会は研修期間が半年間に集約されているため、認定産業医の資格を短期間で習得できる上、実地研修の中で工業地帯の工場見学ができるなど神栖市ならではの特色も魅力になっています。

神栖市若手医師きらっせプロジェクトと連携し、神栖市を日本における地域・職域連携の先進的なモデル医療地域にしたいと考えています。



プロジェクトの詳細はコチラ



## 田中先生に質問！

### Q 神栖市の産業医のニーズとは

A これまでの神栖市の産業医は、地域の先生が臨床で忙しい合間に診たり、市外の先生が来たりしていました。今後は、遠方から月に1~2回しか来ない、ではなくてこの地域で産業医専門の先生がいつでもいるという体制を作れば、地域の方にも安心を提供できるのでは、と思っています。

### Q 市民と産業医トレーニングセンターの関わりは

A 企業で働く人の健康を確保し、その家族の健康にもつなげていきたいです。また、センターを通してドクターが増えることで、地域の健診や外来が充実していけば、と思っています。

### Q 地域特有の病気や健康管理での注意点は

A 地域柄、車社会なので肥満の方が多いです。また都市部に比べると自由に喫煙ができる場所が多く、喫煙率が高い傾向にあります。保健所のデータによると、塩分摂取量も多いです。生活習慣の一つ一つに気を付けることはもちろん、積極的に健康診断を受けてもらいたいですね。

### Q 市民へのメッセージ

A 医療・保健の地産地消を目指しています。これまでは市外の医療機関を利用する方も多かったかもしれませんが、皆さんも身近な医療機関を育てる気持ちで、健診やかかりつけ医を地域から選んでほしいです。そうすれば、その医療機関の質やサービス、設備も良くなっていき、安心できる地域となるはずですよ。今後は若手のドクターも増えていくと思います。医療機関も若手医師も、温かい目で見守っていただけると嬉しいです。

このシリーズでは、市の地域医療を支えるさまざまな人にスポットを当て、その取り組みなどを紹介します。

☎地域医療推進課 ☎0299-77-8207

# みんなが創る！みんなを守る！ かみすの医療



vol.2 産業医



## 神栖産業医トレーニングセンター 統括指導医

田中 完 先生 ひろし

今年4月、白十字総合病院・神栖済生会病院2つの病院内に、新たに「神栖産業医トレーニングセンター」が開設されました。神栖市には多くの企業があり、働く人の健康を守る産業医の存在が欠かせません。今回は統括指導医の田中先生にお話を聞きました。



### 神栖産業医トレーニングセンターとは

このセンターでは、鹿島臨海工業地帯周辺の企業で働く人をサポートするとともに、産業医の育成に取り組んでいます。医師誘致の施策としては、とてもユニークな取り組みとして注目されています。

医療と産業が両輪となって、地域を活性化させていくのがセンターの目的です。社員一人ひとりが健康であれば、労働のパフォーマンスが向上し、結果的に企業の生産性アップにつながります。センターは、そうした健康経営の考え方を実践する場でもあります。

広く一般の方々に、減塩や禁煙を呼びかけたりがん検診を促したりしても、すぐに効果は出にくいものです。しかし、産業医が企業に対してアプローチすることで、企業で働く人だけでなく、ご

家族や地域にも影響は広がります。それによって喫煙率の低下や、地域のがん検診受診率の向上などの効果が期待できます。地域の人たちの健康の“キーマン”になるのが、産業医なのです。産業医が企業だけではなく、地域全体を見ながら診療をしていくことに、このセンターの特色があります。



### 産業医になったきっかけ

初期研修医として、救急医療に力を入れている病院に勤務したときの経験がきっかけです。そこでどうしても助けられなかった患者さんがいまし

た。脳出血で搬送された40代の男性患者さんです。迅速な診断と処置でなんとか命は救えたものの、半身まひになってしまいました。後に奥様に